

リチャード・ドーキンズ (垂水 雄二訳)
『神は妄想である——宗教との決別』
早川書房, 2007年5月刊, 578頁, 2,625円(+税)

Hun IL Myung (明 願生)

1. はじめに

宗教学を専攻する者にとって, “神”(もしくは人間を超越した何らかの存在)は考察せずには済まされない対象である。人類や天地創造を考える上で, 社会は神や創造主を中心とした仮説を常に用い, その存在理由や生成の経緯を説明しようとしてきた。これは何も過去の歴史に限ったことではない。科学的な立証が必要とされる現代においても, この思考は社会構造の根底を支え, 多くの人々の信仰に脈々と受け継がれている。

本書は純粋な学術書とは言い難いが, 世界中で150万部以上を売り上げ, 宗教界のみならず一般社会にも幅広く取り上げられた。そのため評者はこの本の紹介を行うことにした。本書は神の概念を完全に否定し, 人格的な神への信仰を妄想だと断定している。著者ドーキンズはロバート・パーシングの『禅とオートバイ修理技術』の一節を引用する。「ある一人の人物が妄想にとりつかれているとき, それは精神異常と呼ばれる。多くの人間が妄想にとりつかれているとき, それは宗教と呼ばれる」(16頁)。著者はこの命題を力説し, 人間は神や宗教という概念によってどれほど不利益を蒙り, 惑わされているかを科学的に検証しようとして試みている。これは何もドーキンズが初めて提唱した革命的な議論というわけではないが, その表現力と論点の組み立ては人々の幅広い関心を呼んだ。

ここでまず, 著者について紹介しておきたい。本書を著したリチャード・ドーキンズは現在67歳。動物行動学(進化生物学)を研究するオックスフォード大学の教授である。生粋のアングロサクソンで, 父親の仕事の関係でケニアのナイロビに生まれ, そこで幼少期を過ごした。ドーキンズは英国国教会派の信徒として育ったが, 幼い頃から様々な人種に属す人々と接し, 各国の人々がそれぞれに異なる信仰や考えを持っていることを知るようになった。ダーウィニストとして知られる彼は, 遺伝子中心視点論を強く提唱している。神の实在説や超越者による人間創造説を厳しく批判し, その誤りを証明しようとする熱烈な無神論者・反宗教主義者としてもよく知られている。彼はまた, 世俗的人本主義とブライト運動(Bright Movement)の強烈な支援者でもあり, 無神論・合理主義をあらゆる側面から主張している。

本書の構成は次のとおりである。

- 第1章 すこぶる宗教的な不信心者
- 第2章 神がいるという仮説
- 第3章 神の存在を支持する論証
- 第4章 ほとんど確実に神が存在しない理由
- 第5章 宗教の起源
- 第6章 道徳の根源——なぜ私たちは善良なのか?
- 第7章 「よい」聖書と移り変わる「道徳に関する時代精神」
- 第8章 宗教のどこが悪いのか? なぜそんなに敵愾心を燃やすのか?
- 第9章 子供の虐待と、宗教からの逃走
- 第10章 大いに必要とされる断絶? すこぶる宗教的な不信心者

本書はこれら10章より構成されている。紙幅の都合上、各章を詳細に取り上げることは不可能であるので、大まかに3つの部分(第1～4章, 第5～7章, 第8～10章)に分けて紹介したい。(ただし評者が重要と考えた章については個別に取り上げる。)

2. 神という概念

最初の数章においてドーキンズは、高い確率で神が存在しないという自身の主張を科学的に立証しようと試み、宗教と倫理について議論を展開していく。科学的な無神論の主張についてはお世辞にも説得力あるものとは言い難いが、宗教と倫理の関係については、著者は優れた観察力をもって、宗教の存在意義を否定していく。序章において著者はまず、無神論者がいかに「幸せで、バランスのとれた、倫理的な、知的に満足した」人生を送れるかを論じ、破壊的な要素を大きく含んだ「宗教」の存在のしない世界を想像するよう読み手に促す。この部分は、本書が主な対象としているアメリカ合衆国の無神論者を意識した内容のようだ。

ドーキンズは自らの見解をより一層声高に主張していく。無神論者は自己否定的・自虐的にならずに自らを誇りに思うべきであり、精神的な迫害や差別に遭っている彼らが、実際には人口の大部分を占めていると彼は強調する。自然選択の実質的な単位は遺伝子であるとする遺伝子中心主義や、ダーウィンの自然選択説(生物は遺伝子によって利用される乗り物にすぎないという主張を比喩的に表現する)(178頁)に類する科学論が、「神を前提とした仮説」——インテリジェント・デザインなどという、幻想に基づいたコスモスと人類の起源、および世界の現状についての説明——に比べていかに現実的で優れているかを論じている。特にアメリカについては、弁護士 ウェンディ・カミナー¹⁾の例を挙げ、今日のアメリカ社会で宗教をからかうことは米国在郷軍人会館の中で国旗を燃やすのと同じぐらい危険であり、無神論者の社会的地位は50年前の同性愛者の立場と同じだと結論づける(14頁)。こうした強い論調は本書の中盤から終わりに至るまで続く。無神論はより理性的な正論であって、宗教とは人間の尊厳を踏みにじり、差別を助長し、人間を疎外する悪の根源だと著者は繰り返す。

しかしここで考慮しなければならないのは、無神論者を差別する宗教者たちと同じような論を、ドーキンズ自身が有神論者たちに向かって展開しているのではないかということである。確かに

著者の議論は様々な事例によって裏づけられている強力なものだが、ドーキンズの無神論主義の主張は感情的で排他性に満ちていると取られかねない。本書は物事をあまりにも鮮明に「白と黒」とに分別しており、この点でまさに宗教的原理主義者と同列だとも言える。

著者は、子供は親の宗教によって決定されるものではないと強く主張する。「子どものイスラム教徒ではなく、イスラム教徒の両親をもつ子供なのだ。その子供はまだ幼すぎて、自分がイスラム教徒かそうではないかなど決められるはずがない。子供のイスラム教徒などというものは存在しないし、子供のキリスト教徒というものも存在しない」と著者はまえがきで述べている（13頁）。

しかし、これは宗教だけに限らない問題であり、そもそも教育・養育とはそういうものではなかろうか？ドーキンズは宗教のみが、「悪」のウィルスのように親から子へと受け継がれるものだとして強調するが、価値観や慣習、文化や伝統など、人間の社会環境を形成するあらゆる事柄は全てこのような特徴をもっていないだろうか？

ドーキンズは第1章で自らの幼少期を振り返り、美しい宇宙と自然に対する彼自身の愛がいかに「宗教的」であるかを説明する。その上で、「神」という言葉の曖昧さを論じていくのである。筆者によれば、アインシュタインは自然や宇宙の神秘を「神」という表現を用いて比喩的に表していた。彼はこうした態度を“Einsteinian Religion”と定義し、有神論者が一般的に想定する、宇宙の創造者たる“神”との違いを論じる。現在の有神論者たちは「この偉大なる科学者」が「神の存在を信望していた代表的な人物」であったと世間に信じ込ませようとしている、と著者は指摘する。有神論者たちはアインシュタインの名声を利用し、この権威ある科学者から精神的な支援を得ようとしているのだ、とドーキンズは説く。実際にはアインシュタインは強固な無神論者であり、そのためたびたび罵られていた。Calvary Tabernacle Associationの設立者は、「遅かれ早かれ、アメリカ中のキリスト教徒が、冒瀆的な口を持ったアインシュタインに、そして狂気と誤りに満ちた彼の自然淘汰説に、国外退去通告を言い渡すだろう。彼をナチス・ドイツへ送り返すのだ」と叫んだという。本書は全体を通してこのEinsteinian ReligionとGod Hypothesis（創造主としての神への存在信仰）について論じ、神の存在は他の全ての仮説同様科学的に検証されるべきであって、一般的な定説とされる科学と宗教の分業論（non-overlapping magisterial）を否定する（50頁）。

3. 神が存在する理由、しない理由とそれぞれの確率

第1章以降、ドーキンズは神の存在する証拠として宗教者が挙げる理由を列挙し、一つ一つ論駁していく。「神の存在を支持する論証は何世紀にもわたって神学者たちによって体系化され、誤った『常識』の普及者を含めた他の人々によって補完されてきた」と彼は説く。彼によれば、トマス・アクィナスを始めとする有神論者たちは、神が存在する理由として以下のような「証明」を行っている（117頁）。

1. 不動の動者——どんなものも、それに先立って動かす者がいなければ動かない。これは無限の退行へと導き、それから逃れることができる唯一のものは神である。何かが最初の

- 動きをつくらなければならず、その何か（第一動者）を私達は神と呼ぶ（118頁）。
2. 原因なき原因——どんなものも、それ自体によって引き起こされることはない。あらゆる作用には先立つ原因があり、これもまた無限の退行へと私達を導く。この退行は最初の原因（第一原因）で終わらなければならず、それを私達は神と呼ぶのである（119頁）。
 3. 宇宙論的論証——いかなる物理的な事物も存在しなかった時があったはずにちがいない。しかし、物理的な事物は現にいま存在するのであるから、事物を存在に至らしめた非物理的な何かが存在したにちががなく、それを私達は神と呼ぶのである（120頁）。
 4. 度合いからの論証——私達は世界の事物に違いがあることに気づいている。例えば、善、或いは完全さについては様々な度合いがある。しかし私達はそうした度合いを最大度のものとの比較によってのみ判断する。人間は善くも悪くもどちらでもありうるから、最大の善は私達の内にあるはずがない。したがって、完全さの基準を定める何らかの最大者が他に存在しなければならず、その最大者を私達は神と呼ぶのである（120頁）。
 5. 神学的な論証、或いは設計を持ち出す目的論的論証——世界の事物、ことに生物は、目的をもって設計されたかのように見える。私達の知っているもので、目的を持って設計されないで設計されたように見えるものはない。したがって設計者が存在したにちがいない。私達はその設計者を神と呼ぶのである（120頁）。

この5つの“神の証明”を始めとして、ドーキンズは神の存在証明論を2つ、すなわちア・プリオリな思考形式によるものとア・ポステリオリな直観形式によるものとに分ける。上記5つの理由を世界の事物にもとづくア・ポステリオリな証明論とし、ア・プリオリな存在的論証の代表としては、1078年にカンタベリーの大司教アンセルムスが行った論証を紹介する。アンセルムスは、祈りという形で語られたものは人間に向かってではなく、初めから神そのものに向かって語られているという（祈りを聞き届ける力をもった実体なら、自分自身が確かに存在することなど今更証明してもらっても無いはずである）（122頁）。その後ドーキンズは、一神教、多神教の神の存在を支持する様々な論証の実例を取り上げ、それらに一応の敬意を払う素振りを見せながらも、実証性の乏しさを辛辣に批判していく。

ここから数章にわたりドーキンズは、神がほぼ確実に存在しない理由、宗教の成立起源、そして人間が善悪の判断基準をどのように構築していったかを巡り議論を展開していく。彼は有神論者がよく用いる「ボーイング747のたとえ」を取り上げ、「還元不能な複雑さ」についての議論を検証する。ボーイング747のたとえとは、宇宙論者のF・ホイール⁽²⁾が唱えたものである。地球上に生命が誕生する確率は、台風がスクラップの置いてある場所の上空を通過した時にボーイング機を作り上げるのと同じほど不可能に近いというもので、靈魂創造論者がダーウィニストを否定する時に用いる、代表的な有神論の論理である。神の存在を信じる多くの人々が自然選択のすさまじい力をどれほど理解していないかを、これはよく示す例だとドーキンズは説く。

ドーキンズは自らの専門である進化生物学の知識を背景に、人類や生命の発生を説明する。生物の解剖学的特徴、細胞の構造、生化学的性格についてのダーウィンやウォリスの研究を説明し、自らの論証の正当性を明らかにしていく。

しかし、評者はここで大変な違和感を覚えた。ドーキンズは神による人間の生成経緯や創造主

について、それらの物理的な確証はなく、したがって「まやかしに過ぎない」と繰り返す。だが、その代りに彼が提唱する無神論主義を、彼自身は立証できているだろうか。本書においてドーキンズは強い口調で神はいないと言い切る。だが、神がないという科学的な確証を彼は示せていない。「宗教という証拠のない妄想」からの人類の「目覚め」を彼は主張するが、そう大差ない議論ではなかろうか。

その後、著者は宗教の起源をダーウィンの自然淘汰説に基づいて説明し、“宗教は何か便利なものの副産物として生まれた”という仮説を打ち出す。彼は動物行動学的なアナロジーを用いて説明する。蛾が蠟燭の炎に飛び込む行動は偶然な事故ではない。蛾はわざわざ寄り道して炎に身を捧げるのである。これは蛾が月の光を頼りに飛ぶという本能を持っているためだ。つまり、炎に飛び込むという行動は、普段は役に立つ光学コンパスの誤作動の副産物なのである（256頁）。同様に宗教もまた、先行する世代の蓄積された経験をもとに、次世代が生き延びるための教訓として、またその副産物として生じたのではないかと、著者は宗教の起源を説明する理論の一つを打ち出している。そして宗教をミーム⁽⁹⁾に比し、宗教は社会において“精神的なウィルス”のように伝染していったのではないかという主張を繰り返す。

その後ドーキンズは道徳について取り上げる。宗教がなくとも、人間は基本的には善良な行動を取ると彼は強調する。人間の倫理観の起源説明については、ドーキンズは自然淘汰説を退ける。人間は利他的な遺伝子行動に基づき善を選択するのだとし、「神が存在しないと分かたらあなたは人を殺したり、強盗や強姦をするのか？」という問いにほとんどの人間が“否”と答える事は明白だとしている。ドーキンズは、宗教がなくとも人は道徳的な行動をするという結論に達しているのである。彼は宗教の教義こそが人を狂わせ文明を非理性的なものとし、歴史を通じて人類に殺し合いをさせてきたのだと述べ、さまざまな例を取り上げる。彼はノーベル賞受賞者であるワインバーガーの「宗教は人間の尊厳に対する一番の誹謗である」という言説を紹介し、神の名のもとにおいて宗教者によって多くの人が殺害されたことを幾度も記述する。

だが、評者はここでもドーキンズの議論に疑問を投げかけたい。人類の起源以来、たしかに宗教を理由に多くの殺戮が繰り返されている。だが、果たして無神論者によって同じことが行われてはいないのだろうか。

20世紀に登場したヒトラー（彼はカソリックの家で育ったので、議論の余地はあるが）、スターリン、毛沢東、アミン、ポル＝ポトなどは言わずと知れた無神論者である。彼らは宗教を悪と決めつけ、それだけの理由で数多くの宗教者たちを殺戮しなかつただろうか？

ドーキンズは、社会には常にそれに合った時代精神が伴うのだとしている。宗教こそがその社会の道徳観を形成し聖書などの聖典が人々に道徳を教えたのではなく、すでに形成されていた道徳観を、聖典が取り入れたのだと彼は述べる（345頁）。彼は様々な証拠を挙げ、聖書やコーランなどはその時代の倫理観を取り入れた著作物にすぎないという解釈を試みている。

著者の議論はさらに拍車が掛かり、聖書などの産物がいかに人工的なものであり、人類にとって有害なものかを論じている。無神論者の擁護という立場から、彼は宗教への強い攻撃へと転じる。

まず、「創世記」の非常に好まれているノアの物語から始めよう。この話はバビロニアのウ

トナピシュティム神話に由来し、いくつかの古い神話でも知られている。動物が2頭ずつ小船に乗せられるという伝説は魅力的だが、ノアの物語に込められた教訓は唾然とさせられるものだ。神は人間をあまりよく思っておらず、そこで（一家族だけを例外にして）子供を含めた多数の人間を溺死させ、さらにおまけに、残りの（おそらく罪の無い）動物達も同じように溺れさせたのだというのだから。こう言えば当然いらだった神学者たちが、もはや自分達は「創世記」を文字とおりに受け取ったりしないのだと抗議してくるだろう。しかし、それこそ私の言いたい事の核心なのだ！ 私達は聖書の断片を選び出し、どれを信じるべきか、どれを象徴ないし寓話として却下すべきかを選択する。そうした選出と選択は個人的な判断の問題であり、前章で無神論者への批判としてあげた、この道徳的な教えに従うか、それともあの教えに従うかを絶対的な根拠なしに判断するやり方とは五十歩百歩の違いしかない（347頁）。

ドーキンズは上記のような例を取り上げ、学識ある神学者の善意にも関わらず驚くほど多くの人間（ギャラップ調査によるとアメリカ有権者の50%）がノアの箱舟の物語を文字通り受け取っているとしている。

また、2004年にスマトラ地震が発生した際、津波が起こったのは安息日にバーで酒を飲んだりダンスしたりしていた者のせいだと非難したアジアの聖職者や、2005年のハリケーン・カトリーナの被害はその地域に多くの同性愛者が住んでおり「神の怒りを買ったからだ」と発言したテレビ伝道師のパット・ロバートソン牧師などを例に、宗教的原理主義が実社会でいかに蔓延しているかを説明している。

このようにドーキンズは宗教のモラルというものを痛烈に批判し、宗教を倫理的な指標として扱うべきだという主張を強く退ける。彼は聖書の中に女性軽視の例をいくつも見出している。

どうかみなさん、乱暴なことはしないでください。実は私にはまだ男を知らない二人の娘がおります。あなたがたに娘たちをさしだしますから、好きなようにしてください。ただ、あの方々には何もしないで下さい”（創世記19章7-8節）

本書は聖書からのこうした引用を多く紹介し、読者に宗教の非倫理性を印象づけさせようとする。だが、ドーキンズの聖典引用はあまりに多く、彼が目的とする聖書や聖典に対する反感を、かえって半減させているように評者には思えた。また、著者の宗教への嫌悪感があらゆる箇所であまりにも強く表れ過ぎていており、かえって読者を冷静にさせる皮肉な効果があったことも否めない。

ドーキンズはこの後、聖書のあらゆる箇所に（そしてコーランの教箇所において）人種差別、民族浄化、排他性や差別性を促進するようなことが述べられていると指摘し、道徳的な羅針盤として依拠することの危険性を論じている（363-376頁）。

本書は続いて、宗教の子供に対する肉体的・精神的な虐待の実例を多く取り上げる。肉体的な虐待としてはローマ・カトリック教会やアイルランドのキリスト修士会における児童虐待行為（464頁）を、精神的な虐待としては地獄の描写に触れることから生じる幼少期のトラウマなど

を、それぞれ宗教の有害性として訴えている。著者によれば、宗教こそは親から子供へと移される病原菌やウィルスのような存在であり、物心つく前に宗教に教化された子は、善悪の判断が出来るようになる前に排他的な傾向を作り出す悪菌に感染させられ、深く考えることもないままそれを次世代に移していくのだと読者に訴えかける。

ドーキンズはさらに、自らが宗教に敵対心を抱くのは、「多くの場合科学を無視し、社会を悪影響下に置くこと」によるものだとして説明する。最終章において彼は、これほど多くの問題を含みながらもこれまで通り社会の「隙間を埋める」ため、もしくは慰めやインスピレーションのために宗教は必要なのかと読者に問いかけていく。ドーキンズ自身の答えは、こうした隙間は哲学や科学によって充分埋められるというものだ。むしろ無神論的な物の見方によってこそ本当の想像力の自由、倫理的また精神的な現実重視の態度が可能であり、幸福と満足感は宗教という大きなブルカを脱ぎ捨てた時に達成できると、彼は自らの結論を綴る。

しかし、ドーキンズのこうした議論は、評者に2つの疑問を抱かせた。

1つ目は、果たしてドーキンズが訴えているほど文明にとって宗教は「悪」なのかという問いである。たとえば聖書を社会の通念に照らし合わせ、これを道徳規範として誰にも迷惑をかけず生きるならば、それが本当に人類に対して有害なのか。宗教を糧として生きたガンジーやマザー・テレサなどのような高潔な人々も過去に存在し、宗教の全てが「悪」だとは断定できないのではないかと評者は考えている。

もう1つは、ドーキンズが主張するように、哲学や科学が果たして社会の隙間を埋められるかという問題設定の妥当性である。人類は、自らの理解と想像を超えた事柄について、同じ人間がまだ立証すらできていない主張や解釈で満足ができるのか。非常に疑わしいと評者は感じずにはいられない。哲学や科学は人類の問題の全てに対して答えを出しているわけではない。宗教という、人類最古の羅針盤に代わる役割を果たしてはいないのではないかと。筆者の主張に対してはこうした疑問が残る。

5. まとめ

神を題材とする本書は、宗教に関わる全ての人にとって大変興味深い内容で構成されている。ドーキンズは進化論と対峙する宗教を一貫して痛烈に批判している。権威ある進化生物学者が真っ向から手加減なしに宗教を科学的に否定する姿に、評者自身惹きつけられる場面も数多くあったことは否めない。

本書の議論は強固ではなく、立証の確定していない点がいくつかあり、また著者が自らの理論を感情的に展開している点が残念だが（これがなかったらもっと感化される内容であったかもしれない）、有神論者にとっては無神論者の考え方を理解する上で、本書は大変分かりやすい書物である。神の存在を否定も肯定もしない不可知論者にとっては、目から鱗が落ちる発見に満ちた情報源であるかもしれない。

宗教とはどのようなものか？ 神とはどのような存在なのか？ 信仰とは有意義なものなのか？ 科学的な論理のもと無神論の思想を鮮烈に訴える力作である。

註

- (1) 1950年生まれのアメリカ人弁護士，作家。多くの社会問題を題材に取りあげる。女性や少数派の立場を強く主張する活動家としても有名である。
- (2) イギリスの著名な天文学者（1915-2001）。星の元素合成について独自の理論を提唱したことで知られる。ビッグバン説を否定するなど，生前は多くの論争の渦中にあった。
- (3) ミームとは，文化的情報伝達の単位。ミーム論では，文化や情報は模倣によって伝達・淘汰され，遺伝子によって適応進化が進むとされる。